

マレー半島汽車の旅 その1

川島 順

予科21-7

航空7-1

(越谷市)



APAA（アジア弁理士会）の年一度の大会が今年は10月15日より4日間、マレーシアのクアラルンプールで行われた。

昨年のチェンマイ大会に引き続いて今年も高木惣治と共に参加することにした。ただ大会に参加するだけでは面白くないので、マレー半島をバンコックから汽車で南下することにした。

チャーム・ビーチで静養

まずは足慣らしを兼ねて、バンコックから車で約3時間、フアヒンの近くの最近開発されたリゾート地、チャーム・ビーチで2・3日、静養を兼ねて釣りをすることにした。滞在したリージエント・チャーム・ホテルは海岸に面した豪華なホテルで、我々の部屋は独立した2部屋よりなるコテージ。海岸は真っ白いきめの細かい砂浜で、海の水も昨年行ったパタヤビーチよりもはるかに綺麗。

早速、海岸よりの投げ釣りを開始したが、成果は思わしくない。翌朝早く再挑戦。高木がキスを1匹と蟹を小々、小生は蟹ばかり。掌よりもやや小さめの甲羅の丸い“わたりがに”である。足元に寄せてくる波間を見ると蟹が何匹も泳いでいるではないか。手を延ばすと急いで砂の中へ潜り込む。

そのすばやいこと。見当を付けて砂の中を手で探ると、簡単に捕まえることができた。かくして蟹は釣るより手で取ったほうが早かった。

獲物の魚と蟹を家族ずれで来ていた女の子にあげると大喜びしていた。

思わぬ釣りの成果

海釣りが思わしくないので、昼からはホテルの敷地内にある大きな池での浮きりに切替えた。クロパンを餌にして釣半刻頑張っていたがピクともしない。池には鯉に似た大きな魚がいっぱいいる筈なのに。池沿いにあるレストランのボーイが寄ってきて、何か話し掛けてきた。やがて白パンを持ってきて水を付けずにこねて団子にしてこれで釣れという。その内に、ウイソーという名のそのボーイが、今晚、我々のディスコパーティがあるから参加しないかと言い出した。ホテル従業員の野球チーム「イエロークラブ」のなにやら祝賀会らしい。

夜10時という約束なので、ホテル内のディスコクラブに顔をだしてみたが誰もこない。仕方なく外へでるとバッタリ、ウイソーに出会った。バイクの後に乗れという。しばらくして会場らしい所につく。

駐車場の一角を仕切って裸電球とマイクを備え、コンクノリー下の上に新聞紙を敷き、そこに座れという。傍らでは女性数人が急造のバーベキュー設備で焼き鳥や魚、海老の料理を作っている。ビール、ウイスキー、ジュース等が並べられ、宴会が始まった。司会者がマイクで盛んに盛り上げようとしているが、すべてがノンビリしている。一人では間が持てないので眠たがる高木を起こしてきて再び宴席に臨む。盛んに酒や料理のサービスをしてくれるが、11時を過ぎてもなかなかディスコが始まりそうもない。

ややあって記念写真を撮り、謝辞を述べて退散しようとする、ウイソーがまたバイクで送ってくれた。そして、別れ際にいきなり抱きついてきた。小生が約束通りに参加したことがよほど嬉しかったのであろうか、男にあんなに強く抱き締められた経験は初めてである。

平成6年1月号 秩父42号

マレー 半島汽車の旅 その2

10月13日3時15分、我々を載せたバターワース行の寝台急行がバンコクの中央駅を発車した。右手の駅の構内には今話題になっているオリエント急行が停車している。聞くところによる切符はすでに日本の旅行社が全部買い占め、バンコクーシンガポールで15万円するそうだ。

我々の列車はタイのステート・レールウェイの寝台特急、ディーゼル車の20両ほど連結された可成り長い編成で、1等はなし、2等と3等席よりなる。2等には冷房が付いているが、3等にはない。因みに、運賃はバンコクーバターワースの2等寝台（下段）で861バーズ（約¥4300円）、バターワースークアラルンプル2等席34M\$（約1700円）。

我々の座席は2等寝台で、左右2名ずつ向きあった座席で、夜になると頭の上のカプセル型寝台が開いて2段ベットになる。車中の大半はタイ人、マレーシア人でその中にインド人、西洋人が混じって入る。日本人は我々だけらしい。隣の席は子連れの夫婦で出稼ぎ先のカナダから故郷のペナンに里帰りとのこと。

車内の喧騒が収まった頃、座席の下から大きなテーブルを引き出して2人掛けの座

席の間にセッドする。駅構内の食堂で仕込んできたビールやビニールの袋に入れゴムヒモで留めたトメヤンクン（タイの代表的スープ）、ラーメンのような汁ソバ、中華風のおかずの付いたご飯の弁当を取り出して早速、早い夜食をとる。

車窓にはタイ南部の田園地帯の風景が続く。時折、都子の木陰にバラックの民家、小さな町を通り過ぎる。遙か向こうに意外と低い山々が途切れ途切れに連なっている。

辺りが薄暗くなってくると、大きな体つきのボーイがベットメイクを始める。

バンコックで買ったタイ国産のウイスキーを1杯飲んで、やおら2階のベットに這い上がって横たわる。掛布は使い捨てナフキンのような紙の毛布1枚、冷房がよくきいていて寒くてよく眠れない。この寒い思いはこれ以後、バス、ホテル至るところで経験し、暑さを覚悟してきた我々にとって意外な思いであった。

列車は黙々として暗闇を走る。意外と静かでほとんど揺れない。寒い寒いと思っているうちに何時の間にか眠りにつく。

夜明けを待って下のベットに降り、窓から外を眺める。朝霧の中に大きな湖を左手に見ながら列車はひたすら走る。地図と照らし合わせると、ソククラ湖であろうか。

やがて南部タイの要所ハジャイに着く。ハジャイの町の近くにはセメント工場等も見られ商工業都市といった感じ。



ハジャイから約4時間程走るとタイの国境を越えパタンバザールという町に着く。車内で通関手続きをするものとはばかり思っていたら、駅で通関するので降りろといわれ取るものも取り敢えず急いで降りる。訳の分からぬ内に通関を済ませて新しい車両に乗り込む。

マレーシア領に入ると高い梅子の木が多くなり、その下に高床式の民家が散在し、時折ゴム林が続く。一息ついて昼近くなると、車内販売の売り子に混じって、手に手に小さい籠に弁当を入れた小学生くらいの子供の一群が車内を駆け抜けていった。覗いてみると新聞紙になにやら握り飯さしきものをくるんで、売り歩いている。いかに好奇心の強い我々でも手の出る代物ではなかった。やむなく食堂車にいてあまり美味しくないスパゲティを食べる。

昼ちょっと過ぎに終点のバターワースに

着く。ここでマレーシアの急行に乗り換える。終点と思ってノンビリしていたら、線路を挟んだ向こう側の列車の車掌が腕時計を見ながら発車の笛をまさに吹かんとしているのではないか。ポーターを急がせ、小生は線路を横断してやっと列車に飛び乗った。

マレーシア急行列車

新しい列車の最後部に飛び乗り、大きな荷物はそこに置きっぱなしにして最前部の指定席まで移動する。車内は比較的空いていたがサリーを身に纏ったマレーのご婦人がめだつ。暫くすると山が迫ってきた。タイ領でも見られたが、石灰岩の山が浸蝕されて丁度南画に出てくるような奇妙な形をした小さな山があちこちに聳えている。

そして、いくつかのトンネルを抜け、やや大きな河を渡ると、やがてスズの鉱山で有名なイポーに着く。イポーとはマレー語でスズのことだそうだ。落ち着いた地方の小都市といった感じ。イポーで一息ついた列車は休む間もなく、ひたすら南下する。

日が傾き始めてから、夕食を食べに食堂車に行く。民族衣装を身につけたちょっとした美人と、澆刺とした肢体をミニスカートに包んだいかにもマレーシア人と思われる二人のウエートレス。その割にお粗末な食堂車。ボール紙に五、六品のメニューが書いてある。サンドウィッチ、焼きそば、焼き飯、フライドチキン、コーラ、ジゴースにコーヒー、肝心なビールはなし。ここはイスラムの国である。

やや平野が開けてきて、民家もポツポツ増えてきた。緑の小高い丘の裾野にやけに明るいレンガ色をした地肌があちらこちら剥出しになっているのが目に着く。右手には丁度、造成地のような白っぽい広場が続く。これがスズの採掘場であろうか。

小さな河を幾つか渡ったがいずれも真っ

黒に濁った水が流れている。粘土質の土壌の関係であろう。ちなみにクアラルンプールとはマレー語で「泥の河の会うところ」の意味だそうだ。

そろそろ辺りが薄暗くなり始めた。車窓から見える街灯の数がだんだん増えきた。クアラルンプールももう間近であろう。車内の人々が動き始めた。(完)